わがまちが生んだ偉人

偉人から読み解く「現実から真実に迫る」ヒント

下村千秋

Chiaki Shimomura

「真実」にこだわった文学者

芥川龍之介や有島武郎、北原白秋、西條八十ら日本を代表する文学者が投稿した雑誌『赤い鳥』。日本の児童文学発展に多大な影響を与えたこの雑誌に多数の創作童話を発表した作家がいる。阿見町が生んだ下村千秋（1893－1955）である。

『赤い鳥』に発表した作品を中心に、阿見町教育委員会は、平成9年（1997）、『あたまでっかち―下村千秋童話選集―』を発刊した。それによると、下村千秋（以下、下村）は、大正14年（1925）発表の『乞食のロレンゾー』から昭和11年（1936）の『旅客飛行機』まで、合わせて24点の作品を『赤い鳥』に寄稿している。

本の題名となった『あたまでっかち』もその中の一つ。昭和10年（1935）に発表された。童話ながらも舞台は茨城の県南地域。書き出しは、霞ヶ浦の位置や景色の描写で始まる。「琵琶湖を厳格なお父さんとすれば、霞ヶ浦はやさしいお母さんのようだ」と身近な湖を擬人化し、導入部に置いている。

物語は、厳しい父親とやさしい母親を対比させながら展開する。主人公の「あたまでっかち」な「林太郎」が、毎夜、父から怒鳴られることに嫌気がさし、実家に帰ってしまったお母さんを探しにいく物語。

林太郎は、父が母につらくあたる理由を「自分は『ごろっこ』のように頭でっかちなので、それがあらそいのたねになるのだ」と思い込んでしまう。何日過ぎても母は戻ってこない。林太郎はついに母に会いにいく決心をする。同行者は、林太郎の弟分となった犬のシロ公である。

物語の結末は読んでいただくとして、作品中に当時、霞ヶ浦で使われていた「さっぱ舟」が登場する。また、お母さんを探してたどり着いた「土浦」は、「小さな店がごちゃごちゃと並んで、いやな匂いがして、むし暑く」と生々しく描かれている。童話にしてはリアルな表現が随所にみえる。

『下村千秋の世界』に下村瑞穂が「父 千秋の想い出」を寄せている。その中で「無理せずに自分の意思を通す父には一つ信念があったのでしょう。どんな事柄でも自分の目で確かめ、観察し、体験して作品を仕上げたようです」と。

下村作品について『阿見町史』は「三期に分けて考えられる」と指摘。第一期は大正年代の純文学の時代。第二期は昭和初年より太平洋戦争に至るまでの社会小説、農民小説時代。第三期は終戦後の中間小説時代。『赤い鳥』寄稿の童話は、年代的に第一期から第二期にまたがっている。

これらの作品群で下村文学を代表する作品は、『街のルンペン』や『天国の記録』等の社会小説にあるとみられてきた。「ルンペン」（浮浪者の意味）という言葉が流行するきっかけともなった。

加えて『阿見町史』はこうも指摘する。「千秋の全作品を検討すれば、千秋の真価はむしろその農民小説にあると思われる」と。「農民の悲惨な姿を描いた『湖畔』『河畔初夏』などは着実なリアリズムによる傑作である」と評価している。

下村は稲敷郡朝日村（現阿見町）に生まれた。県立土浦中学校（現県立土浦第一高等学校）、早稲田大学を卒業。新聞社勤務等を経て作家活動に入り、亡くなるまで多くの作品を世に出した。

没後から約半世紀を迎えた平成15年（2003）、同町生涯学習課所属のふるさと文芸検討委員会が発足した。下村文学に対する本格的な顕彰が始まったのである。（文中敬称略）

主な参考文献
『阿見町史』（昭和58年発行）。『あたまでっかち―下村千秋童話選集―』（平成9年、阿見町教育委員会発行）。『下村千秋の世界―その研究と検証』（平成24年、阿見町教育委員会ふるさと文芸検討委員会発行）』）等。

阿見町立図書館入口手前の左手敷地に建つ下村千秋の顕彰碑＝稲敷郡阿見町若栗(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長
冨山章一